
犬マユゲ

アジト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬マユゲ

【Nコード】

N7271F

【作者名】

アジト

【あらすじ】

姉の愛するタレ目犬にマユゲを描いてやる。姉弟の日常のくだらない一コマ。

「ただいまー」

俺は家に帰ると高校の通学バッグをリビング投げ捨て、冷蔵庫に向かう。

自転車通学でカラカラに乾いた喉を潤すため麦茶をがぶ飲みする。

「ぶはあ」

生き返る！

「ん？」

麦茶を飲み干したところで気配を感じて庭を見ると、ポンスがこつちをじっと見ている。

ポンスとはウチの飼い犬。いつも姉ちゃんがエサを世話してるんだけど、そういえば姉ちゃん今日は部活の用事で遅いって言ってたっけ。

リビングのガラス戸を開け庭を覗くと、腹ペコなのかカラの皿を前に期待に満ちた目でこつちを見ている。

「しょーがない。たまには俺がやるか」

キッチンを漁って見つけたドッグフードを皿に盛って差し出す。待ってましたと言わんばかりに食らい付くポンス。

「食え食え」

ポンスは姉が昔拾ってきた。俺は覚えてないけど、さんざん親とケンカしてようやく飼うことを認めてもらったらしい。

それからポンスの世話姉ちゃんが責任を持つてやってる。姉ちゃんに用事があるときには俺や親も手伝っているが、それ以外は姉ちゃんやんが面倒を見ている。一緒にいるのがとにかく楽しいらしい。ポンスという名前も姉ちゃんが大好きなポン酢から名づけたくらいだ。タレ目なポンスはオスで体もそれなりに大きいくせして気が弱い。たまに一緒に散歩にいくと、ギャンギャン吠えるチワワに本気でビビる程。

姉曰く、そこがまた可愛いらしい。

「でもなあ」

ポンスの顔を見る。食事に満足して油断しているのか、タレ目の顔がさらに情けない。

「そうだ！」

「こんなもんかな…うん」

俺は一応家に姉がいないことを確認してから、ポンスにマユゲを描いてやった。それもゴルゴばりの立派なマユゲを。もちろんすぐ消せるように水性のフェルトペンで。。

「なんか、想像してたよりかっこいいな」

まだ右マユしか描いてないが、殺し屋風の顔つきになったポンスはじっと俺を見る。タレ目がウソのように凜々しく見える。

安心しろ、ちゃんと左マユも描いてやるから。

「真治。帰ってる?。」

と、庭の向こうの道路側からウチの母親の声。

「帰ってるよ、何?。」

「荷物持つの手伝って欲しいの。とりあえず玄関開けて。アイス溶けちゃう」

「はいよ!。」

直ぐに戻って左マユを描いて、写メとったら速攻でマユゲ消そう。
姉ちゃんにバレたら恐ろしい。

▼

「真治!!。」

部屋で寛いでいると、姉がもの凄い勢いで部屋のドアを開けた入ってきた。鬼のようなその怒りの表情を見て、瞬間的に片マユのポンスの顔が浮かぶ。

やべー!忘れてた!絶対ポンスのことだ!やばいやばいやばい!

「ポンスにイタズラしたでしょ！」

「うわぁ、ごめん！すぐ消すつもりだったんだよ」

「でも消えてなかったなー、不思議だね」

「そ、そうですね」

「フザケンナ！」



次の日の朝、俺はケツの痛みでいつもより早く目が覚めた。

結局あの後にカラーバットで仰向けで寝れなくなるくらいケツバットされ、ようやく許してもらった。その後も俺が食べるはずだったミスのドーナツも全て強奪されたけど。

「ふぁ…まだケツいてえ」

欠伸をしながらリビングへ降りる。まだ朝五時、テレビの音も聞こえてこないし、誰かが起きている気配はない。珍しく俺が一番乗りだ。

静まり返ったりビングに到着。だがすぐに庭の方からチャリチャリと鎖がこすれる音が聞こえてくる。

「お…」

庭を見ると既にポンスが犬小屋の周りをグルグル周っていた。
散歩に連れて行ってほしい！と、バウリングがなくても分かる。

「元気だなお前は…」

俺は一度部屋に戻って上着を羽織り、ポンスと散歩に行こうと庭に出る。

と、今日のポンスはやけにかっこいい。殺し屋風だ。近寄ってよく見ると、俺が描いた右マユだけでなく、左マユも描き足されていた。

「おお…よく描けてる」

って、姉ちゃんが描いたのかこれ？人のことをあんなにケツバットしといて…。



「おかえり、散歩連れてってくれたんだ」

「ただいま。姉ちゃん…人のことあんなにケツバットしといて自分だって描いてるじゃん」

俺からの非難にさすがに悪いと思ったのか、ちょっとしおらしく返事する姉ちゃん。

「ああ…ゴメン。何かかわいかったから」

「ほら、マユゲいいじゃん」

「でももう消してあげないとね」

「そうだね。散歩させるとさすがに恥ずかしいかも」

残念だけど、殺し屋風ポンスとも今日でお別れか。さすがにマユゲ犬を散歩させるのは勇気があるしな。

ん？

「姉ちゃん、マユゲ何で書いた？」

「え？マツキーで」

「ちょっと、それ油性！」

「あ…あ！」

すまんポンス…しばらく殺し屋風でいてくれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7271f/>

犬マユゲ

2010年12月8日02時18分発行